

石川県立総合看護専門学校

永原 胡子

目的 高度経済成長が始まった昭和50年代以降、女子雇用労働者は年々増加した。このような背景の中で、特に「看護婦」「保健婦」という専門的技術の習得のために入学し、卒業すると同時に明確な職業に就くことの出来る本校の学生達が、どのような職業意識を持っているか、又、学業が進むにつれて（専門教育の充実と共に）職業意識はどのように変化していくかについて把握することを目的とした。

方法 調査対象は、本校の第一看護学科生74名、保健学科生23名の計97名に調査票を配布。調査期間：58年9月30日～10月20日 回収率：94.8%

分析数： 第一看護学科 69名 保健学科 23名 計92名

結果 本校の学生の家族状況は、母親の有職者が過半数を占めており、職業に役立つ資格や技術を身につけていたために本校へ入学し、一般的には女性が職業を持つことに反対するものはいなかった。むしろ仕事を持たずに生きてゆくことの方に不安を持っていた。しかし「社会に出て能力発揮」「自らの経済力を持つ」等により、働き続けることに對する不安感を92名中90名が持っていた。ちなみに不安の内容は「結婚後の家事、育児等大の協力度」が圧倒的に多かった。その中で就業型をみると、保健学科は「定年型」第一看護学科は「再就職型」と考へよう。又、家族の間で女性の職業について話し合っている家庭は半数位であったが女性が職業を持つことに對しては父親も母親もかなり高い賛成を示している。概率的に本校の学生達の職業意識は高いと考へるが、第一看護学科よりも保健学科の方が特に高いと考へよう。